1Ea-6

家庭洗濯に関する研究（第７報）

－最近の洗濯機・乾燥機の変化と柔軟仕上げ剤の適合性について－

ライオン家庭科学研究所　○井口好江・森　貞光・西尾　宏・犬伏式生

［目的］演者らは、これまで、急速に伸展してきた全自動洗濯機の機能に着目して、洗剤との適合性につき報告してきた。一方、大容量・多機能洗濯機の登場により、ウールやシルク製品等家庭洗濯される対象衣料が拡がったり、まとめて大量に柔軟仕上げされる機会も増加する等仕上げの領域でも様々な影響が生じている。そこで、本報では、従来の洗浄性に関する検討に加えて、家庭洗濯における柔軟仕上げの実態を把握するとともに、最近の洗濯機・乾燥機における適切な柔軟仕上げ方法について検討した。

［方法］最近の洗濯実態調査を踏まえて、各種衣料（綿、化繊、毛、絹）について、浴比や柔軟剤の濃度、投入時期などを変化させて柔軟性を調べた。柔軟性の評価は、洗濯機における柔軟処理・未処理および乾燥機における柔軟処理（シート型柔軟剤使用）・未処理をそれぞれ行い、シェッフェの一対比較による官能評価と剛軟度測定により求めた。

［結果］全自動洗濯機では、洗剤が標準使用量より過多だったり、被洗物量が多すぎると、２回目のすすぎ液中のアニオン量が多く、柔軟剤の主成分であるカチオン界面活性剤と複合体を形成し、柔軟効果が十分に発揮されない現象が認められた。また、浴比が小さくなるに伴い、柔軟性は低下する傾向を示し、特に、浴比が20を下まわると顕著であることが分かった。これは、主に、衣料重量あたりの柔軟剤使用量が減少することに起因しており、使用量については、実態を考慮して、現行の水量換算から被洗物重量に応じた使用量の検討を進める必要がある。このほか、衣料用乾燥機を用いた時の柔軟効果についても、検討を加えた。